

## 10. 自然現象

### 10-1. 時間 (季節・1日の区分)

#### 10-1-1. 季節

春：パイカル～パエカル アン paykar～paekar anしたら、は「春になったら」ということ。春がマタ mata (?) で、冬がパルカル parkar (?) だ。

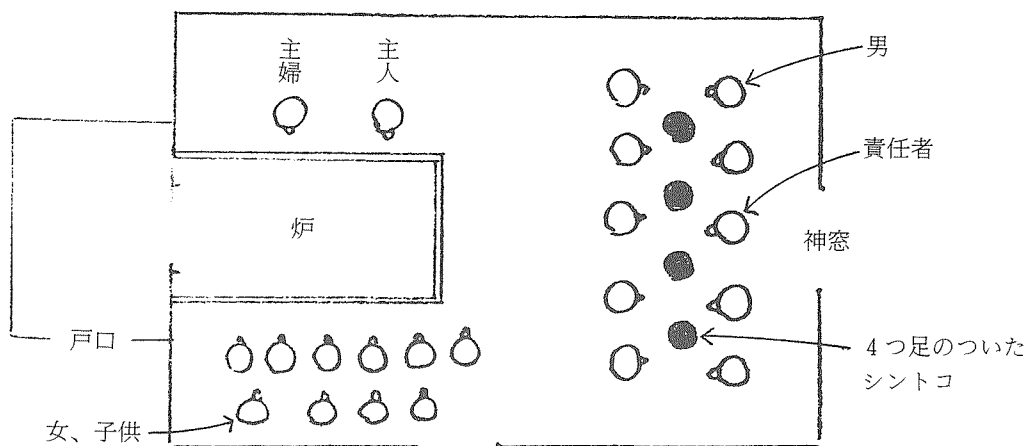
[鶴川汐見、新井田セイノ氏]

#### 一年の祝い

部落を守る意味のカムィノミを昔は旧正月に入って行った。年に1回酒を作った。この年初めのカムィノミをアシリパ イノミ asirpa inomiという。個々の家でカムィノミをした後、余った酒をコタンコロクル kotan kor kur (村長) の家に集め、他のコタンの人を呼んでくる。他のコタンの人が責任者となってカムィノミをする。何か悪いことが起きれば、きちんと頼まなかったからだ、祈りを述べた者の責任になる。コタンコロクルの家は大きくてポロチセ poro ciseと呼ばれる。

稲葉徳一氏の記憶によると、上座 (炉と神窓の間) にだいたい6人くらいずつが二列に並んで座り (並んで座ることをウエソッキ uesotkiという)、責任者は、神窓を背にして中央に座る。列の間に酒の入ったシントコ sintoko (行器) を置き、シントコにイナウの鉢巻をする。他の人、女の人などは陰にいる。女が酒を酌む。男は酒の残りを自分の気に入ったおばあさんあげる (パーケシ pakes)。桶に酒を残して家に持ち帰ることをイエメトゥ iemetuという。

図16. 新年の祝いの座



通常、自分の家で個人的なカムィノミをするときは、炉の端に座り、神窓を開け、窓の方を向いて祈る。

[鷓川汐見、稲葉徳一氏]

部落を守ってもらうために行うカムイノミをハルソイオマレ harusoy'omareと呼ぶ。これは冬の暇なとき、仕事のないとき、コタンコロクルの家(ここの家、新井田家)で行われた。昔は集めた米でどぶろくを造って全員集まってカムイノミした。この時はイチャルパ icarpa (先祖供養)はしない。神様(コタンコロカムイ kotan kor kamuy)だけのことで仏のことでないからだ。

[鷓川汐見、新井田キク氏]

## 10-1-2. 月の名

(「月の名前思い出せるものを挙げて下さい」という質問に対し、「月の名前かどうか分からないが」と前置きして、次のように答えられた。)

母と母の従弟の豊吉じいさんは同年だが生まれた月日が違った。母は春先に生まれたのでトイタ ラポク toyta rapok「畑おこしの頃」に生まれた、と言い、従弟は秋に生まれたのでイチャ ラポク ica rapok「穂を刈る頃」に生まれた、と言った。

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

## 10-1-3. 1日の時間区分

朝：クンネイワ kunneywa(夜明け)。クンネイワ アン ナ。ホプニ ワ スケ。kunneywa an na. hopuni wa suke. 「朝になったよ。起きて炊事しろ」と言われた。

夜明け：シリペケレ sirpeker

昼：トーカブ tókap。トーカブ アン ナ。ホプニ tókap an na. hopuni「昼だよ。起きろ」

夕方：オヌマン onuman 暗くなったこと(?)。6～7時。クンネ kunneは8時頃。

夜：クンネ kunne。タネ クンネ アン tane kunne anした 「もう暗くなった」。シリクンネ sirkunne「暗くなる」。ネイタ レウシ neyta rewsu「どこに泊まるか」。タヌ克蘭 アナクネ ネイタ レウシ ネ tanukuran anakne neyta rewsu ne 「今晚はどこに泊まるか」

ゆうべ：オヌマン onuman

昨日 ヌーマン núman

明日 ニサッタ nisatta

日が長い トー タンネ to tanne

日が短い トー タクネ to takne

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

## 10-2. 気象・天候

### 10-2-1. 寒さ

タント アナクネ メアン tanto anakne mean「今日は寒い」

タント アナクネ メアン ナ tanto anakne mean na 「今日は寒いな」

ク メライケ ku merayke 「私は寒い」

シンルプシ sinrupus 「冷え込む」

大きな川のあるところは寒さがきびしい。「沢あらし」といって、朝の4～7時頃にもものすごく冷え込む。桶が凍って割れたりした。水樽が凍って水が無いこともあった。

冬の夜、ウウェペケレ uwepekerをしていると、寒さで道路が凍って、鉄砲が鳴るような音のすることがあった。

気温が低く、水温が低いと畑作は悪いが、シシャモは、豊漁だと言われていた。畑が凶作だとシシャモが豊漁だと言われる（5-1-2参照）。

2月が一番寒い。大川の凍る音がした。凍るとその上を歩いて渡った。2月に10日程氷切りの仕事もしたが、氷の厚さが60cm位もあった。

大川には12月にはもう氷が張っている。川を流れる氷はチャイ cayという。川の底が凍って、それが水面に浮いて来るのだ。それが凍って厚く張るようになる。氷はルプシ コンル rupus konruという。4月には氷は解けている。

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

しばれる（強烈に寒い）ことをルプシ rupusという。

[穂別富内、森本八重氏]

#### 10-2-2. 暑さ

暑いのは、シリポプケ sirpopke。タント アナク シリポプケ ネ tanto anak sirpopke ne 「今日は暑いな」。タント アナクネ シリポプケ tanto anakne sirpopke 「今日は暑い」。

タンパ アナクネ シリポプケ ネ tanpa anakne sirpopke ne 「今年暑い」

シリセセク sirseseke 「暑い」。タンパ アナクネ シリセセク tanpa anakne sirseseke 「今年暑い」

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

#### 10-2-3. 台風

嫁にきた後で、台風のとて、姑さんがチタルベ citarpe (ごぎ) の材料であるガマを継ぎ足して長くして、家の角々から十文字に張って砥石を四隅に重りに下げていた。砥石はなんというか知らない。イルイケ iruykeは研ぐこと。

台風がくると、姑のばあさんは「家の中を歩いていれば家の神さんの力になる」と言って、寝ないで歩き回っていた。このばあさんは「靈感の強い」ばあさんだった。

[鷓川汐見、新井田キク氏]

台風をウェンレラ wenreraという。木がたくさんあったのでそれほどひどくはなかった。

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

#### 10-2-4. 風

レラ ルイ rera ruy 「風がふく」

レラ ヤム rera yam 「風がやんだ」

ポプケ レラ popke rera、ウエン レラ wen rera 「竜巻、巻き風」

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

#### 10-2-5. 雲

ニシクル niskur 「雲(?)、曇った」

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

#### 10-2-6. 霧・雨・雪

霧

ウラル urar 「ガス、霧」

アトウイ カ タ ウラル atuy ka ta urar 「海の霧」

キムン カ タ ウラル kimun ka ta urar 「山の霧」

ウラル イサム urar isam 「霧がはれた」

ウラル エク ノイネ urar ek noyne 「霧が出てきたようだ」

トイトイ カ タ ウラル toytoy ka ta urar 「かげろう」

雨

アプト ルイ apto ruy 「雨が降る」

アプト ヤム ナ apto yam na 「雨がやんだ」

雪

ウパシ ヤム upas yam 「雪がやむ」

ウパシ ルプケ upas rupke 「雪が積もる」

ウブン upun 「吹雪」

昔は木が多かったので、雪が飛ばされずに残るので、雪も今よりは多かった。

初雪は11月頃。この地方には、あまり雪は降らない。トゥナシ ウパシ tunas upas(?)

カウカウ ルイ kawkaw ruy 「あられがふる」

氷

コンル konru 「氷」

ノキ コンル noki konru 「つらら」

コンル ル konru ru 「氷が融ける」

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

氷が融ける事をコンル ルー konru ruという。

川が凍ってできた橋をルイカ ruykaという。

[穂別富内、森本八重氏]

霜

クルプペ kuruppe 霜

トゥナシ クルプペ tunas kuruppe 早霜

モイレ クルブペ moyre kuruppe(?) おそ霜

[鵜川汐見、新井田セイノ氏]

#### 10-2-7. 雷

カムイ フム kamuy hum 「雷」

[鵜川汐見、新井田セイノ氏]

#### 10-2-8. 虹

ラヨチ rayoci 「虹」

[鵜川汐見、新井田セイノ氏]

#### 10-2-9. 地震

シリシモイエ sirsimoye「地震」。地震の時、マサカリを持って庭に出て柄で地面をトチトチたたきながら、「エ イクケウエ ク ラリ ナ e ikkewe ku rari na おまえの背骨をおさえるぞ」と言って鎮める。

大地震の時、女がペウタンケ pewtanke「高い声で叫ぶ」するのを見たことがある。神様に危機を知らせる。女の声は神様に聞こえやすいという。火事、事故の時にもやる。女は全員やる。ウウオイ、ウウオーイ と叫ぶ。

これは孫じいさんに聞いた話だが、浜厚真(?)の方に大きな沼があって大魚がおり、それが動くとき地震が起きるのだと言う。今は神様に頼んで杭につないでもらっているので大地震にならないのだ、と聞かされた。

[鵜川汐見、新井田セイノ氏]

地震(シリシモイエ sirsimoye)のとき祭壇(イナウチパ inawcipa)の地面は割れない(トイ ヤシケ toy yaskeしない)から、そこに逃げろと言われた。

[穂別富内、森本八重氏]

#### 10-2-10. 洪水と津波

高波はコイプルケ koypurkeという。

津波はオリブンペ oripunpeという(オロブンペ oropunpeともいう)

山津波、オキムンベ okimunpe、川の増水はキムンベ kimunpeという。

孫じいさんは「サカンリトク」という名だったが、こんな話をしてくれた。新井田家は自分で7代目だが、初代が生まれる前に大津波があって、7人を除いて部落が全滅した。そのときの津波は穂別の富内の山まで行ったという。山の上につるのからまったものがあるので、つるを刈ってみると、津波でよりあがったクジラの骨だったと言う。

汐見に人が増えたのは、この津波の後、山厚真の人々と生き残った人々が結婚して、親戚関係ができてからだ。

ライバチン raypacinという所があって、高台になっている。上の方にも下の方にも沼がある。自分の小さい頃そこで一尺もあるアカハラをとったり、氷切りをしたが、津波の時にその高台に逃げて人々は助かったそうだ。だから、孫じいさんは、津波の時はそこへ逃げるよう、子供

にも伝えて置け、と教えてくれた。

津波は川沿いに行くものだという。

オキムンペ オレプンペ ウトモシマ okimunpe orepunpe utomosma 「山津波と浜津波がぶつかり合う」

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

姑さんが言っていたが、津波の時、逃げる途中で、部落の人達はライバチンの沼に埋まってしまったそうだ。海とライバチンの沼はつながっているのではないか、とも言っていた。

[鷓川汐見、新井田キク氏]

#### 10-2-11. 川の流氷

秋に川が凍り始める前に上流から氷が流れることをコンル モム konru mom という。

[穂別、森本八重氏]

### 10-4. 地理・地形

#### 10-4-1. コタンと近隣の概況

##### チン・コタンの周囲の状況

チンコタンは、以前は、チン川の向こう岸、日高寄りの小高い岡の上にあったが、私（稲葉氏）の祖父の世代の頃か、男が出稼ぎに出ていて、女子供しかいない時の春の2回目の野火でコタンが全滅し、現在の所に移住してきた。

コタンの付近はヤチ（湿地）でカヤやヨシに混じってサビタやハンノキが生えていた。チン川は、ナイ nay で、鷓川の本流は、ベツ pet である。チン川は、鷓川の枝川で、その出口（ナイ プトゥフ nay putuhu）は、下流の方である。

明治45年頃（稲葉氏10才）、私（稲葉氏）の生まれたトゥンニカコタン tunni ka kotan（現在の柏山）には、八軒の家があった。どのコタンにも村長がいた。チンコタンとトゥンニカコタンは、近いが、別々に村長（コタンコロクル kotankorkur）がいた。コタンの間で嫁のやりとりがあった。

[鷓川汐見、稲葉徳一氏]

昔のチンコタンの周りはハンノキと茅で宮戸の町が見えないくらいだった。水田を作っていたのは部落で新井田勝男氏等3軒だけ。だから苗代と言うものが不思議でならなかった。

浜へ行く途中は柏の大木ばかりだった。下から日の光が見えなかった。ドングリがバラスを敷いたようになっていた。

やち（湿地）のところにはハンノキが生えていた。

お地藏さんの祭りのある8月23、24、25日は必ず大雨になり、部落の下の方が水に浸かった。隣部落へは1週間は通れなかった。馬車を持っている人しか通れない。オウトゥンネ o'utunne（西の方、道路をはさんで家の立ち並ぶ反対側）の方角が水についた。鷓川の橋は4、5回は

流されている。橋の無い間は渡し船で川を渡った。

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

サッペサツ satpesat (もと、イモツペの向こうにあった) は、水害の時、ここだけ水害もなくチンの人がみんなここに行って助かったのでサッペサツと名がついた。サッペサツは「乾いたところ」の意)、イモツペにはアイヌはいない。

チン・コタンの周りには、柏の木が多かった。子供の頃は鷓川には渡し船があったが、学校にあがるころに橋ができた。川原には柳が多かった。トシカ toskaは川原から離れて小高い所の意味である。17歳の時、大水が出て、田も流された。

[鷓川春日、大川原絹代氏]

隣の家のことを、アウタ awtaといった。

[鷓川汐見、稲葉徳一氏、新井田セイノ氏、新井田キ氏]

#### ヘトナイ・コタンの周囲の状況

自分は勇弘の生まれで、鷓川のチン・コタンで16歳まで育った。17歳でここ(ヘトナイ)に嫁にきた。夫の家は、現在の富内の向いの岸にあった。現在の富内の向い岸の辺富内あたりには、アイヌの家が10軒くらいあった。和人も入っていたが、あちこちに2、3軒ずつ散らばっていた。富内との間に現在の橋のあるところに、渡船場(チプオ cipo「舟を漕ぐ」)があった。道は、踏み跡道のようなもので、道の両側に赤ドングイ(イタドリ)、フキ、ヨシが茂っていて荒山のようなであった。木原には、山子が入っていたのだろうか、ナラ、カシワなどの大きな切り株があちこちにあり、これを取り除いて畑を開墾した。鉄橋から少しこちらから開いた水田は少しはあったが(坂のあたりに水田があった)、主に畑を作っていた。

[穂別富内、森本八重氏]

#### 10-4-2. 地形名称

川で舟をつなぐのは高台の下の深みになっている所だった。

トイ toy 「畑」、トイトイ toyttoy 「地面」

ナム ワクカ nam wakka 「わき水」

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

川をペツ petという。川尻をベップツ petputという。

[鷓川春日、大川原絹代氏]

小さな沢をポンナイ ponnay、大きな沢をポロナイ poronayという。川口(支流が本流に出る所)は、ナイプトウ nayputuという。

やち気味の場所は トー to「沼」という。ポイント pon to「小沼」、ポロト poro to「大沼」

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

川で舟をつないでおくところは、高台の下の深みになったところである。

[鷓川汐見、新井田キク氏]

海をアトゥイ atuyという。

[鷓川春日、大川原絹代氏]

ヤナギをスス susuという。

川をペッ petという。

道をルー ruという。

川の崖をトシカ toskaという。

石をスマ sumaという。

[穂別富内、森本八重氏]

### 10-4-3. 方向名称

オロンネ oronnneは、神窓の方のことで、家の東側である。東は大事にする。

それに対してオウトウンネ o'utunneは、戸口（アパ apa）の方で家の西側。（9-3 参照）

#### 行く・来る

カルパ k arpa 「私は行く」

タント トウイマ オロ アルパ tanto tuyma oro arpaする「今日は遠くへ行く」

ヒナクン アルパ hinakun arpa 「どこへ行くの」

ネコロ nekoru oman 「どこへ行く」

タント アルパ ワ エク tanto arpa wa ek した 「今日行って来い」

クアニ アルパ ワ エク kuani arpa wa ek した 「私は行って来た」

ヒナク ワ エク hinak wa ek 「どこから来たの」

#### 方向

エコイポクン ekoypokunとか エコイポク ekoypokは、下手で川下のこと。それに対してエコイカ ekoykaは、上手、川上のこと。

川上はペナ pena、川下は panakeという。

[稲葉徳一氏、新井田キク氏]

ペニウンクル peniunkur は上流の人(たとえば鷓川から見た穂別)。ペニウン peniun さ アルパ arpaする「上流へ行く」。

ペニウン カルパ peniun k arpa 「上流へ私は行く」

ペニウンクル ワ エク peniunkur wa ek 「上流から来る」

エピシネ カルパ episne k arpa 「浜手へ私は行く」

エキムネ カルパ ekimune k arpa 「上流へ私は行く」

ヘペラ カルパ hepera k arpa 「上流へ私は行く」

[鷓川汐見、新井田セイノ氏]

ホパシ エカシ きた hopasi ekasi kita 「川下からおじいさんが来た」

ホペラ フチ きた hopera huci kita 「川上からおばあさんが来た」

ヘパシ エカシ アラパ した hepasi ekasi arpa sita 「川下へおじいさんが行った」

ヘパシ エカシ サン した hepasi ekasi san sita 「(同上)」

ヘペラ フチ アラパ した hepera huci arpa sita 「川上へおばあさんが行った」



ペトルン エカシ アラパ した petorun ekasi arpa sita 「川へおじいさんが行った」  
 ヘラシ エカシ アラパ した herasi ekasi arpa sita 「(同上)」  
 ヘラシ エカシ ラン した herasi ekasi ran sita 「川へおじいさんが行った」(「こちらの言い方が前の言い方よりもいいかもしれない。ラン ranは下へ行ったということだ」)  
 ペトロワ エカシ エク した petorwa ekasi ek sita 「川からおじいさんが来た」  
 ホラシ エカシ エク した horasi ekasi ek sita 「(同上)」  
 エクシネ アラパ した ekusne arpa sita 「川向いに行った」  
 ペツ カマ エク した pet kama ek sita 「川向いから来た」  
 オクシネ エク した okusne ek sita 「(同上)」  
 エピシネ アラパ した episne arpa sita 「浜へ行った」  
 エピスネク episun ek 「浜へ行くこと」  
 エキムネ アラパ した ekimne arpa sita 「山へ行った」  
 オピシネ エク した opisne ek sita 「浜から来た」  
 オキムネ エク した okimne ek sita 「山から来た」  
 カニ カラパ ワ。 kani k arpa wa. 「私が行くよ」  
 エアニ アラパ セ！ eani arpa se! 「おまえ行け！」  
 ヒナク ネ エ アラパ？ hinak ne e arpa? 「おまえどこに行くんだ？」  
 ヒナク ワ エ エク？ hinak wa e ek? 「おまえどこから来た？」  
 ヒナク タ エ アン？ hinak ta e an? 「あなたはどこに住んでいるか？」  
 クアニ アナクネ\* テタ カン ワ。 kuani anakne teta k an wa. 「私はここに住んでいます。」

[穂別富内、森本八重氏]

#### 10-4-4. 地理・地名

ポロトイ porotoy (地名) に固まって畑があった。辻商店の向い側にあった。

[鵜川汐見、新井田キク氏]

チンコタンは、旧名をチンカルコタン cinkar kotanと言った。昔、この辺は、鹿や熊の動物がたくさん取れた。動物の皮を乾かすために皮を張ることをチンカル cinkarと言う。この村の人々は皮張り作業を大変上手にやったのでこの名がついたという。チンコタンから鵜川本流まで1kmくらいあるだろうか。

[鵜川汐見、稲葉徳一氏]

熊を取ったりして皮を開いて干すことをチンカラ cinkarという。この人達が、その作業を大変上手にやったので、村の名をチンというようになった。チン・コタンで一番偉い人は、新井田スサンクルという人だった。

[鵜川春日、大川原絹代氏]

鵜川の川の名前は、芋ができる花の名をムク mukとかムカ mukaとかムクカ mukkaと言い、

その花が咲くと秋味（鮭）を取り始めた。川の名前はこの花に由来すると言われている。

富川まで高台全体が柏の木の山だったので、トゥンニカ *tunnika* という名が付いた。

チン川の向こう岸の小高い所にもう一つコタンがあったが名前は忘れた。

チンコタン近隣のコタンは下流から上流へ向かって次のようである。

イモブペ コタン（現在の宮戸、国道ぞいの辻商店付近）

ケナシロ コタン

サッペサ コタンは、5－6軒の家があった。ヤチ（湿地）で、鹿がたくさんいたころ、腹がいっぱいになった鹿がたくさん集まってきて（サツ *sat*）休む所であったので、その名が付いた。

オサンネブには、コタンがあったかどうか不明。

下カナエ（右岸、春日一区）今も10軒くらい家がある。

上カナエ（右岸、春日二区）

モイベチ（右岸、春日三区）

キリカチ コタン（右岸）

バロ沢 コタン（右岸）

キリカチ／キリカツ コタン（左岸、花岡二区）ダムがある。

下キナウシ（現在の東生田）

中キナウシ（現在の有明）湯の沢が鶴川と穂別の境界である。

ニワン（仁和、仁湾）より上流の穂別の人たちと葬式の時などに交流があった。

ニワンから上の方は「父」のことをイヤボ *iyapo*ではなくハボ *hapo*という（6－1－4）。

[鶴川汐見、稲葉徳一氏]

クーナイ *kúnay*は今の旭岡のこと。ここのアイヌはトランネ *toranne*（なまけものだ）という話だ。クー *ku*は「落とし（わな）」のこと。鳥が騒ぐとわかって、取りに行く。

有明はキナウスという。

[鶴川春日、大川原絹代氏]

いまの生田のバロ沢のことを昔はユクペツ *yukpet*と叫んだ。地元では、鹿の皮にくるまれた子供を川の中から救いあげたのでそういう、と言っているそうだ。この話は、丹野フユ氏より聞いた。

[鶴川春日、大川原守義氏]

穂別にはカイクマとトミウチにコタンがあった。

[穂別富内、森本八重氏]